

《博士論文要旨および審査報告》

後藤康行 地域社会の言論空間

——千葉県君津郡『中川村青年会報』にみる村のコミュニケーション——

——学位請求論文——

I 論文要旨

後藤康行

一 本論の目的

本論は、近代日本の地域社会にはその地域に住む人々の間でのみ成立する固有のコミュニケーション装置が存在していたという前提に立ち、そのコミュニケーション装置たる地域社会の言論空間の実態について明らかにすることを目的としている。

それは、メディアを積極的に利用していた地域社会の上層に位置していた人々に対し、下層に位置していた人々はメディアを利用する機会に恵まれていなかったという、近代日本の地域社会における「メディア格差」の存在を明らかにした有山輝雄の研究（有山輝雄『近代日本のメディアと地域社会』吉川弘文館、2009年）と、地域社会の上層ではないところに位置していた近代日本の農村青年たちの手による「謄写版（ガリ版）文化」という文化・文芸運動の成立に注目した鹿野政直や大門正克の研究（鹿野政直「大正デモクラシーの思想と文化」（『岩波講座日本歴史18 近代5』岩波書店、1975年）、大門正克『明治・大正の農村』岩波ブックレット、1992年、同『近代日本と農村社会—農民世界の変容と国家—』日本経済評論社、1994年）との間を埋めるための研究といえるものである。

近代日本の地域社会における「メディア格差」と「ガリ版文化」、一見矛盾しているように思えるこの二つの現象だが、地域社会には「メディア格差」を埋め、「ガリ版文化」を成立させる独自の言論空間が存在していたというのが本論の立場である。その言論空間の具体的な事例として、本論では千葉県君津郡中川村（現在の袖ヶ浦市南部、小櫃川流域に位置していた村）に組織されていた中川村青年会と、この青年会の会誌である『中川村青年会報』（以下、『会報』と略記する）に焦点を当てることで、中川村における情報伝達のあり方、村のコミュニケーシ

ョン活動について分析を行った。

二 本論の構成

本論の構成は、序章と終章を含めると全八章構成である。序章では、本論の問題意識や目的、先行研究との関係について述べ、終章では結論を述べている。以下、各章の概略を述べると、第一章では考察の対象となる地域と史料の特徴を把握するため、中川村、中川村青年会、『会報』それぞれの概要と、中川村青年会の創設者であり、『会報』の編集兼発行者でもあった村上米蔵の経歴について明らかにした。

第二章では、中川村におけるメディア利用の状況を明らかにするため、新聞、雑誌、書籍の購読状況、ラジオの普及状況、村民のメディア利用の充実を図る中川村青年会の活動などについて考察した。第三章では、情報の発信地である東京と、中川村青年会がいかに向き合っていたのかを考察した。

第四章では、村上米蔵と青年会員の対外観に焦点を当て、両者の対外観の思想的連関をみていくことで、村民同士のコミュニケーションがいかに成立していたのかを考察した。第五章では、村上と青年会員とのコミュニケーションについてさらに掘り下げるため、両者の天皇観について考察した。両者の天皇観を描き出すために、ここでは中川村で行われた奉祝行事に注目した。

第六章では、第五章までの考察が中川村の男性ばかりに焦点を当てたものになっていたという反省から、村の女性に焦点を当てた。中川村に組織されていた婦人会の活動内容や、中川村の男性の女性観をみていくことで、中川村におけるコミュニケーション活動と女性との関係、村の女性の社会的地位について考察した。

三 本論の結論

以上の各章の考察により、中川村青年会（および中川村婦人会）が村民のコミュニケーション活動を支える言論空間としての役割を果たしていたことを実証した。終章では、本論の結論として、中川村青年会が村にもたらしたもの（「メディア格差」を埋めるコミュニケーション装置、「平凡」な農村としての秩序、昭和戦時体制の底流）と、現代に問いかけるもの（「メディア・リテラシー」の必要性）について述べ、さらには『会報』のような近代日本の地域社会において発行されていた地域メディアを研究することの意義について展望を示し、論を閉じ

た。

Ⅱ 審査報告

- (主査) 専修大学文学部 教授 新井 勝紘
(副査) 専修大学文学部 教授 大谷 正
(副査) 東京経済大学コミュニケーション学部
教授 有山 輝雄

審査委員会は、提出された学位請求論文を、問題関心・研究の先進性、論文構成上の説得性、研究の到達点、史料・文献収集の広さと実証性、従来の研究史の変革と今後の研究の展望と課題などの観点から審査を行った。また、口頭試問・筆記試験等において、上記の審査観点について直接請求者本人より判断の材料を得ることを確認した。

本論文は、近代日本の地域社会には、その地域に住む人々の間でのみ成立する固有のコミュニケーション装置が存在していたという前提にたつて、そのコミュニケーション装置である地域社会の“言論空間”の実態について、千葉県君津郡中川村を実例として詳細かつ徹底的に明らかにしたものである。

この研究は、後藤氏によれば、次の二つの研究の間を埋める研究と位置づけられるという。一つは、地域社会においては、メディアを利用できる上層部と、メディア利用の機会に恵まれない下層の人々との間に「メディア格差」が生じるという研究である。もう一つは、下層に位置する農村青年たちが作り出した「ガリ版文化」ともいえる地域の文化・文芸運動の研究である。後藤氏が対象とする中川村の青年の活動は、その「メディア格差」を埋め、同時にまた「ガリ版文化」にも積極的に取り組んでいたという。この村のそうした実態を証明するために、青年会に注目し、かつ青年会会誌である「中川村青年会報」に焦点をあて、その徹底的な分析を実施し、情報伝達のあり方、村のコミュニケーション活動につい

て実証的研究をすすめたものである。

論文は8章からなり、次のような構成となっている。

序章 近代日本の地域社会と「メディア格差」

1章 中川村青年会の誕生

2章 中川村におけるメディア利用環境

3章 東京と向き合う中川村青年会

4章 対外観にみる村民のコミュニケーション

5章 奉祝行事を通してみる中川村と天皇

6章 中川村婦人会と村の女性の社会的地位

終章 中川村青年会と近代日本

また、この論文のなかでは、中川村青年会の創設者であり、かつ青年会会報の編集兼発行者である人物と、村の青年会会員とのコミュニケーションに注目し、両者の天皇観や対外観にもメスをいれ、青年会自身が、村民のコミュニケーション活動を支える言論空間としての役割を果たしていたことを、明らかにしている。地域メディアというものの研究の重要性を、中川村の実例を通して実証したともいえる。それは村の上層部と下層部のメディア格差を埋め、かつまたごく平凡な農村の村の秩序や戦時体制へと進む底流にもなったことを明らかにした。村内の共同体においてバランスのとれた状態を保つことができたのも、青年会によって若者の発言の場が確保されていたという指摘につながってくる。また、昭和戦時体制への底流として、青年会や婦人会がその基盤としての役割を担っていたことにも触れ、戦時体制支持の心性は、長い間の村民同士のコミュニケーション活動を経て醸成されたものであるともいう。

最後に現代への警鐘という意味で、こうした中川村の実例から、日常的にメディアに囲まれ、誰もが情報の発信者になりうる現代社会では、「膨大な情報量に接する日常が、実は非日常への入口とつながっている」ということの自覚が必要で、「メディア・リテラシー」の必要性に触れている。そして地域メディアの研究は、近代日本の地域社会を、コミュニケーションという視点から捉えなおすことを可能にすると結論づけている。

口頭試問では、ここでいう言論空間は、外からの情報を内に仲介する役割と、内側の水平コミュニケーションの二つの役割があったことが指摘され、オピニオン・リーダーの役割をもう少し明確にするべきではないか、あるいは、村の経済

的構造にも目配りをするべきではないかとの指摘もあった。さらに、中川村という一つの地域での事例研究の持つ限界が指摘され、それをどう乗り越えていくか、さらにはこの事例研究はどのような普遍の問題と交差するかとの指摘もあった。

それに対して後藤氏からの的確かつ真摯な回答も踏まえた上で、審査委員は、当該の論文が、地域メディア研究の新しい地平を切り拓く可能性を示し、今後この分野の研究に対して一つのモデルともなるのではないかとの認識をもったうえで、この論文の研究上の価値を認め、本学の学位論文としての評価に十分に値すると判断した。

Ⅲ 学位授与要記

一、氏名・本籍	後藤 康行（東京都）
二、学位の種類	博士（歴史学）
三、学位記番号	博歴甲第二十号
四、学位授与の条件	学位規則第四条第一項該当
五、学位授与の年月日	平成二十五年三月二十二日
六、学位論文題目	地域社会の言論空間——千葉県君津郡『中川村青年会報』にみる村のコミュニケーション——
七、審査委員	主査 専修大学文学部 教授 新井 勝紘 副査 専修大学文学部 教授 大谷 正 副査 東京経済大学コミュニケーション学部 教授 有山 輝雄